ME-BYO Summit Kanagawa

ME-BYOサミット神奈川 2026 春

未病指標シンポジウム

2026年4月24日(金) 13:00～15:00 開催

会場：**横浜シンポジア** 横浜市中区山下町２　産業貿易センタービル９階

主催：神奈川県　共催：未病産業研究会 ME-BYO® Industry　ME-BYO Summit Kanagawa

開催記録

Program

13:00～13:05 **開会挨拶**　**大谷 泰夫 氏**　神奈川県立保健福祉大学理事長、神奈川県顧問

13:05～13:15 **基調講演**　**黒岩 祐治**　神奈川県知事、ME-BYO サミット神奈川実行委員会名誉実行委員長

13:15～13:45 **特別講演**　**宮田 裕章 氏**　慶應義塾大学医学部教授、神奈川県顧問

パネルディスカッション　『未病指標で描く持続可能な社会づくり』

13:50～14:20 **プレゼンテーション**

- ショートプレゼン１　**鄭 雄一 氏**　神奈川県立保健福祉大学副学長、大学院ヘルスイノベーション研究科長
- ショートプレゼン２　**向野 俊史 氏**　Arteryex 株式会社データビジネス事業部長
- ショートプレゼン３　**竹田 幸司 氏**　沢井製薬株式会社執行役員（グループ CDXO）
- ショートプレゼン４　**大塚 寛 氏**　PST 株式会社代表取締役
- ショートプレゼン５　**池浦 富久 氏**　東京大学工学系研究科長アドバイザー、株式会社メドミライ取締役、神奈川県顧問
- ショートプレゼン６　**牧野 義之**　神奈川県未病推進ディレクター



14:20～14:50 **ディスカッション**
モデレーター：鄭 雄一 氏　　パネリスト：計７名（ショートプレゼン登壇者＋宮田 裕章 氏）

14:50～15:00 **閉会挨拶**　**黒岩 祐治**　神奈川県知事、ME-BYO サミット神奈川実行委員会名誉実行委員長

実際の講演動画は
右記２次元コードを
ご確認ください。

神奈川県　KANAGAWA
ME-BYO サミット神奈川実行委員会　事務局　神奈川県政策局いのち・未来戦略本部室　問い合わせ：☎ 045-210-2715
運営事務局：ファンメディケーション株式会社

Opening Remarks

開会挨拶



大谷 泰夫 氏

神奈川県立保健福祉大学理事長、
神奈川県顧問

本日は、このように多くの方々にご参加いただいて感謝を申し上げたいと思います。

2015 年以降、 ME-BYO サミット神奈川実行委員会では、世界の叡智を結集させ、ME-BYO サミットという国際シンポジウムを開催しております。未病を基軸に、個人の行動変容、それを支える学術、医療、産業、行政など、多様な分野で未病指標を基軸とした新たな社会システムの構築について議論してまいりました。そうした動きが、今日のテーマ『未病指標を基軸とした新たな社会システムの構築』や、WHO などとの、グローバルな連携構築にまで至っていると思います。

一昨年の ME-BYO サミットでは、認知症、地域のイノベーション拠点、文化活動など様々なテーマを取り上げ、未病コンセプトの拡張性を示したものとなりました。昨年度からは、生活習慣、メンタルヘルス・ストレス、認知機能、生活機能の4つを柱にしながら、シンポジウムを5回シリーズで順次開催しているところであります。本日はその3回目で、『未病指標』を中心に進めていくということでございます。

未病は、完全な健康状態というものはなかなかなく、グラデーションとして存在しています。そこに着目して、どう改善していくかという自助努力で取り組む分野です。また、効果を実感することも難しく、薬や手術のように劇的に改善したとか、効果が体感できるのとはちょっと違う世界です。

逆に、人間の脳は反未病的な存在で、酒は飲みたい、甘いものが食べたい、辛いものが好きだ、夜はゴロゴロしたい。そっちの方に動こうとします。しかも未病の世界は、高齢化とともに徐々に劣化、低下していく部分があります。そんな世界で、将来に向けて今の自分をどう自己認識して、どう努力したら、自分の人生の中で有効に感じられるか、というのが未病のコアな考え方だと思います。

新政権では『攻めの予防医療』を強く打ち出しています。未病という言葉こそ使いませんが、重要なコンセプトになるかと思います。

予防医療は、診療報酬をバックにする医療からのアプローチですが、未病の世界は、個人の努力や企業の努力といったもので実現しようというアプローチであります。

本日、そうした議論が深まって、お聞きいただいた皆さんが共感されれば大変嬉しいことだと思います。

Keynote speech

基調講演

『未病社会システムの実現に向けて ―未病指標のデータとエビデンス』



黒岩 祐治

神奈川県知事
ME-BYO サミット
神奈川実行委員会
名誉実行委員長

我々のヘルスケア・ニューフロンティアという施策は、健康と病気はグラデーションなのだから、病気になる前に健康に持ってこようという未病改善のアプローチと、最先端の医療、最新技術の追求を融合させながら健康寿命を延ばしていこうというものであります。

未病コンセプトに賛同する企業が集まる未病産業研究会は、現在 1,289 社が参加しており、産業化の流れができています。2015 年には WHO と覚書を結び、WHO の地域事務局である WPRO（西太平洋地域事務局）とも連携を結んで、未病というコンセプトを広げていこうという国際展開もしています。

過去の ME-BYO サミットでの話題が、自分がグラデーションのどこにいるかを知ることでした。

そこで開発したのが『未病指標』で、一人ひとりが自分の健康状態（ME-BYO）を知り、自分で変えていこうとすることが大事だということです。

それを受けて『ME-BYO BRAND』ができ、第１号が『MIMOSYS（ミモシス）』。声の分析だけで心の未病状態がわかるものです。また、徳洲会湘南鎌倉総合病院は、『国際未病医療センター』を病院の中に作り、音楽療法を小林院長が自ら実践されています。『MIMOSYS』でその効果を見ると、音楽療法の前と後で数値が２割向上しているという結果です。

また、県営団地ではシニアの合唱事業が、横須賀、綾瀬、小田原ではシニア劇団が、この事業をやる前と後で、参加者の数値を上げました。竹山団地では、神奈川大学のサッカー部と運動やスマートフォンの教室などで多世代交流をして、6 ヶ月ごとに血管年齢を測定したら、平均 81 歳の参加者から１年後に血管年齢が 40 歳の人が出たというすごい効果が現れました。いかにこの様なアプローチが有効かということです。

要するに、我々が目標にしているのは、人生 100 歳時代でも、みんながいのち輝く『Vibrant INOCHI』を実現させるための仕組みづくりです。健康に持っていくことによってお金が流れる仕組み、これができると産業界も一緒になって、みんなを健康にしようとする流れができます。このあたりを議論したいと思っております。

特別講演

『いのち輝く未来が拓く、未病と Beyond SDGs』



宮田 裕章 氏
慶應義塾大学医学部教授、
神奈川県顧問

大阪万博 2025 でプロデューサーをやっておりました宮田です。今日は神奈川県顧問として『Vibrant INOCHI』をいかに万博にインストールしてきたか、また、神奈川でどう発展していくかをお話ししたいと思います。

改めて、神奈川の未病の視点は非常に革新的で、一人ひとりが魅力的に生きるために、あるいは多様化したライフスタイルの社会に対応した、時代を先取りした提案だと言えます。

健康と病気の二元論は、ある種わかりやすさもあるけれども、未病というところが見えないので、結局病気になってから治療を始めなきゃいけなかったわけです。しかし、いまや未病が可視化できるようになり、どうアプローチできるかの介入が現実的になってきました。 まさにこのコンセプトに現実が追いついてきたということです。

この神奈川が提言した『Vibrant INOCHI』が、SDGs の先の新しい指針として立ち上がりつつあるというところも、今日少しお話したいと思います。



万博の『いのち輝く』というテーマについてですが、これは文明の転換点にあるともいえます。

今まで農業革命、産業革命、情報革命という大きな流れがありました。農業革命は、飢え死にしないためのインフラとして、大勢が協力をして国や秩序が必要になり、社会が生まれていったわけです。産業革命は、機械によって人の活動エネルギーが数万倍に拡張されたため、その先に新しい仕事、第三次産業を中心とした新しい経済を作っていったわけです。産業革命以降、この社会を駆動しているのはお金で、あらゆるものが経済の合理性の中に組み込まれていきました。でも、それじゃいけないと、まさに SDGs というのもその走りでした。世界は大きな格差の中で、新しい世代には、世界は持続可能かつ公平でなければならないという意識が高まっています。

それでは、この転換点で何が必要なのか、『いのちの輝き』ですね。

2030 年に終わる SDGs の先を『Vibrant INOCHI』という問いから始めた時に、一体何が必要なのかを万博のテーマウィークとして立てました。

1 つ目は『地球と生物多様性』という、命のつながりがどう持続するのか、命は人間だけじゃないということです。例えば、ミツバチが絶滅すると人間は絶滅するという、多様な命のつながりの中で未来を感じていこうとする必要があります。

2 つ目は『健康とウェルビーイング』です。大阪ヘルスケアパビリオンは人気で、400 万人以上が来場しました。今の自分をスキャンすると 25 年後の自分がわかるため、それを見て焦りを覚えて、ヘルスケアのソリューションをみんな必死にやってみるわけです。400 万人がそれを体験したという意味においては、未病をまた違う形で拡張しました。

3 つ目は『平和と人権』です。世界の混乱の中で、何が未来なのかを問いながら提示しているわけですね。異なる視点を排除せずに考えていこうというのが今回のメッセージでした。

大屋根リングはその象徴の一つで、それぞれは異なっていても、未来のどこかでつながっていく「多様にして、ひとつに響きあう未来」を表していました。国に帰れば口をきかないような厳しい関係にある国々も、このリングの中では、未来を見ながら対話ができたと言う方がいたのも、一つの成果だと思います。

4 つ目は 『学びと遊び』です。生成 AI は、今年の 4 月にアンソロピックのクロード・ミュトスというものが出てきて、フェーズが大きく変わりました。あらゆるものをハッキングできる可能性がある、銀行口座がいつの間にかゼロになる。人間の制御を超えた力として、AI が台頭したことが間違いないということです。

そういった中で、私たちは知識とか技術だけではなく、問いを立てる力というものを学んでいかなければいけないことを表現しました。

5 つ目は 『食とライフスタイル』です。食は生きていくため

特別講演

『いのち輝く未来が拓く、未病と Beyond SDGs』

に必要な栄養ですが、過剰になれば健康に対するリスクになりますし、社会に対してのコストにもなります。地産地消で地域を豊かにする食べ方もあれば、地球を蝕むような食べ方もありますし、環境破壊になることもあります。子ども食堂は単なる栄養補給ではなく、本質的に居場所作りですよね。誰かの心の支えになるのです。このように食べるということだけでも、いろいろな世界とつながっていくということです。

6 つ目には『コミュニティとモビリティ』です。東京そして首都圏は 30 年間、世界一の都市圏と言われてきていましたが、昨年 3 位ぐらいまで落ちて、これからは規模だけで未来を作っていく時代ではないということです。どういった豊かさを地域から立ち上げていくかみたいなところも、すごく大事になると思います。

7 つ目は『未来への文化共創』です。SDGs は命の灯火を消さないことからスタートしましたが、実は生きがいを持って生きていく支援をした方が、つまり、いのちの輝きを支援した方が貧困を救う上でもはるかに有効だと、この十数年で明らかになってきました。



万博が成功したと一番確信したのは、参加してくれた人が多様な未来を感じることができたとおっしゃってくれた時です。多様な未来、いのちの輝きというのは一つじゃなくて、ダイバーシティが五感で伝わった瞬間が成功だったのではないかと思っています。

一番重要な体験として語られているのが、リングの中で空を一緒に見たことです。いろいろな個性が、数万人の人たちが一斉に夕日を一緒に見るということ、未来を一緒に見ること、これがすごく重要な象徴として語られました。

これまでは万博の真ん中にそびえ立つようなシンボルを作ることが定石でしたが、今回はあえてそれを空白にすることで、参加者にそこにどんな未来を作るのかを考えてもらいたかったわけです。

今までの社会の原理は最大多数の最大幸福で、それしかできませんでした。みんながたくさん集まってコミュニティを作った時には、平均的なものに寄せていくということしか、科学も技術もできなかったわけです。行政のサービスもそこを目指すことがゴールだったんですが、これからはそうじゃないということです。

例えば貧困というものがあるわけです。日本は平均的なものは世界一になりました。ご飯も美味しい、治安もいい、健康寿命も世界一になりました。ただ、平均からこぼれ落ちた時に非常に苦しいわけです。シングルペアレンツの貧困率は OECD 36 カ国中 34 位というような状況です。女性であること、あるいは非正規雇用などが重なってきた時に、非常に厳しい状況になるのですが、これがデジタルを使うことによって支えられます。

例えば生まれた子が 3 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月でどういう成長するのかをみたときに、平均から外れ始めたら何かが起こっているわけです。それは貧困かもしれないし、健康問題かもしれないし、虐待かもしれない。今までそういった個別対応ができなかったところができるようになると、それが最大 “ 多様 ” の最大幸福になるわけです。

万博ではまさにこの Beyond SDGs ということを標榜してテーマウィークを立ち上げ、議論してきました。ただ、我々は開始前の混乱と、盛り上がりすぎたことによって、もみくちゃになっている中で、この議論を上手にまだ引き継げていないところがあります。

例えばテーマウィークから、それがどういう形でグローバルゴールズにつながっていくのか。これは国連ともいろいろな議論をしていますが、この Beyond SDGs の先は何かというと、答えを集めた、目標のセットというよりは、いのち輝くという視点から、共にどうよく生きるのかという、動的なプロセスとして世界と共有していくべきなのではないかというところが私自身の問いとしてはあります。

まさに「命の灯を消さない」から「いのちの輝き」というところに、神奈川県が世界のどこよりもリードして紡いできたわけです。その概念を、2027 年の GREEN × EXPO2027 で結実させていくことができれば、これは未来につながっていくのではないかと思います。

万博が『いのち輝く』という言葉をちょっと借りたんですけど、それを神奈川の地にお戻しして、世界に結実させていくことができれば、グローバルゴールズとしてこの神奈川県の地で皆さんがやってきた取組みを結びつけながら、一緒に 2027 年を迎えることができればなと思っておりますし、私自身も尽力したいと思います。

パネルディスカッション

『未病指標で描く持続可能な社会づくり』

プレゼンテーションパート

ショートプレゼン1　科学的知見に基づく未病の見える化 ～「未病指標」の取組み～

未病指標の考えは、健康と病気の二分論ではなくて、連続したものと捉える未病の概念を、個人の現在の状態や、将来の疾病リスクを数値で『見える化』するということです。「未来予測が可能である」「個別化されている」「連続的かつ可変的である」「使いやすく費用対効果が高い」「一定の科学的根拠がある」という５つの要件があります。

我々は人材育成、アントレプレナーシップ、調査研究、シンクタンク機能を果たし、県からは調査フィールド、データ、ネットワーク、地方自治での実装の場をいただくということで、お互いにコラボしながら課題に取り組んでおります。最近は WHO の協力センターに指定されました。WHO と協力しながら、健康な高齢化に関する政策研究、人材育成、普及啓発などの神奈川県での取組みを、国際的に共有しているところでございます。



モデレーター

鄭 雄一 氏

神奈川県立保健福祉大学副学長、
大学院ヘルスイノベーション研究科長

ショートプレゼン2　未病指標× PHR が生み出す 新しい健康支援

弊社は健康銀行という構想を掲げ、健康情報を患者さん自身で管理し、それを資産として運用して健康になっていくことを目指しております。この構想を実現するために、『パシャッとカルテ』というアプリを運営しております。これは健康診断や血液検査の結果表を写真で撮るだけで、アプリ一つにすべてまとめられるものです。

この PHR アプリと未病指標を掛け合わせることで、新しい健康支援ができるのではないかと思っております。病気がある人には変化を見逃さないモニタリングとして、まだ病気でない人には努力を続けていきたくなるフィードバックとして、一人ひとりの次の一歩を支援するものと考えております。



パネリスト

向野 俊史 氏

Arteryex 株式会社データビジネス
事業部長

ショートプレゼン3　医療・臨床の現場における PHR 活用 ～ SaluDi のご紹介～

弊社は、主に医療の現場で使っていただける PHR の取組みを進めています。

PHR アプリ『SaluDi』の最大の特徴は、患者さんの許可が得られると医療機関と連携できることです。医療従事者がパソコン画面で患者さんの普段の血圧の状態などを確認できるということは、わかりやすく言うと、デジタルの血圧手帳です。バイタル以外にも食事や服薬の状況、体調なども見ていただけるようになっております。今後は、未病指標と連携をさせて、一緒に取組みを進めさせていただきたいと思っております。

今後は総合ヘルスケアカンパニーに変わっていくことを目指し、『健やかな暮らしのために』という企業理念の実現や、IT やアプリを活用した日々の行動変容で健康寿命を伸ばし、医療費の削減に取り組んでいこうと考えております。



パネリスト

竹田 幸司 氏

沢井製薬株式会社執行役員
（グループ CDXO）

パネルディスカッション

『未病指標で描く持続可能な社会づくり』

プレゼンテーションパート

ショートプレゼン 4

未病指標で描く持続可能な社会づくり



PST は、『MIMOSYS』という「声の質」から病態を分析するという会社でございます。様々な疾患を音声だけで拾うことができ、東京大学とストレスを客観的に数値化するという研究をし、早十数年経っているというベンチャーです。

声帯は不随反応でコントロールしにくいところ。非言語情報なので、元気のない声を出しても、元気だとわかってしまうというところが最大の特徴になります。

『MIMOSYS』は個人の方が自分の状態を見るものですが、自分の状態を把握後、家族や会社の人事部などに見ていただく管理画面も合わせたものが『ボイスログプラットフォーム』です。未病の状態を可視化して声掛けをすることで、離職が防止されたり、状態が軽いうちに治療できたりしますので、様々な領域に使っていただければと思っております。

パネリスト

大塚 寛 氏

PST 株式会社代表取締役

ショートプレゼン 5

健康資産を守る『未病指標～ヘルシーエイジングインデックス』



未病指標をどう使っていこうか、自分が持ってる健康の資産をどうやって毀損していかないか、そういうことを社会システムとして変えていきたいと考えております。

そこで、いろんな企業に支援していただいて、ヘルシーエイジングインデックスという研究をしています。80～100歳の既往歴も認知症的な気配もない、介護度1以下という方たち150名にウェアラブルを24時間、365日つけていただき、かつ朝と夜アンケートもお願いし、なぜ健康なのかの客観的データと主観的データを取りました。それを7つのカテゴリでアルゴリズムを作り、それぞれ解析して、今これを指標化しています。

こういうAIを使った技術と未病指標でモニタリングしながら、自分の健康について考えてもらえればと思います。

パネリスト

池浦 富久 氏

東京大学工学系研究科長アドバイザー、
株式会社メドミライ取締役、
神奈川県顧問

ショートプレゼン 6

未病指標（ME-BYO Index）と、喜怒哀楽？七転八起？を、共に生きた11年を振り返る！



2015年、「科学技術力も使ったサイエンス未病としてゲノム、腸内細菌、コホートデータなどをやってくれ」という首藤副知事からの具体的な示唆のもとで、宮田さんや超高齢者研究の新井さんらと未病指標の研究を始めました。2016年9月、腸内細菌を科学技術で制御する福田さんのチームと連携を開始しました。介入実証コホートの成松さんとは、未病指標を科学的に検証する連携を行いました。2017年5月には、3世代ゲノムコホートを研究する東北大学東北メディカル・メガバンクと覚書を締結し、今は保健福祉大学が共同研究を推進しています。そして2025年2月、知事が未病指標を国の政策にすると号令をかけられましたので、同年の未病指標分科会で様々な企業と未病指標の利活用を検討してまいりました。医療と未病、かかりつけ医と県民、これを繋ぐプラットフォームとして、これからは未病指標の地域への展開を強化していきたいと思っています。

パネリスト

牧野 義之

神奈川県未病推進ディレクター



ディスカッションパート

未病指標で描く持続可能な社会づくり

鄭 雄一　今回、２つ論点があると思います。個人にとっての未病指標の価値とは何か。そして、未病指標をどう未病社会システムに活かすか。まず１点目について、お願いします。

向野 俊史　『パシャッとカルテ』のユーザーさんは、定期的に通院される方が多いのですが、身体のちょっとした変化は、通院以外で知るのは難しいということです。そのような中で未病指標は、最初に気づきを得る機能として価値があるのではと思っております。

大塚 寛　日頃の状態を可視化することができます。ストレスチェックを受ける間の部分で、自分の客観的な数値を見ることによって、行動変容をしていただくのが一番良いです。ただ、次第にやらなくなる可能性が高いので、意識せずとも解析されて自分の状態がわかるものを新しく開発しました。

鄭 雄一　無関心層のようなところにもリーチする工夫があるということですね。



竹田 幸司　生活習慣病は痛みがないので、日々の記録はなかなか続きません。そこで「SaluDi」は、ご本人が許可されると医療機関の方々と共有でき、伴走役になってもらえるので続けることができます。今後は、自分自身でも改善の意欲をより持てるような取組みも、進めていきたいと思っております。

鄭 雄一　未病指標が成功するためには見える化はもちろん、医療従事者を巻き込み、励ましてもらうのもうまい仕組みかなと思いました。

宮田 裕章　健康は変化を感じにくく、モチベーションとつながりにくいので、グラデーションの中でどう感度高く日々を生きるかがすごく大事です。『Vibrant INOCHI』と未病がつながっていくと、また新しい展開が起きるのじゃないかなと思っています。

鄭 雄一　ネガティブなことを言うよりも、ポジティブなことを指摘してあげた方が励みになるので、そういうのも未病指標にうまく導入できると良いのではないかと思いました。

宮田 裕章　デジタルだと個別化できるので、その人らしい人生を楽しむことで、『Vibrant INOCHI』と未病が結びつくと思います。

鄭 雄一　では、第２の論点についてお願いします。

池浦 富久　世の中に広めるため、どのアプリにも API 連携ができたらと考えています。機は熟してますが、次に来るのはコストです。今日会場の皆さまにもお願いしたいのですけれども、未病指標を広げるためにぜひ仲間になっていただきたいと思います。

鄭 雄一　確かに今、プログラム医療機器は逆風にさらされているので、皆で知恵を出さないといけないと思います。

牧野 義之　僕は３つの取組みを考えています。１つは、未病の見える化と、公的機関が民間の PHR の特色ある取組みとコラボレーションしていくこと。２つ目は、健康投資につながる未病改善の効果測定の評価です。３つ目は、医療現場や大学病院と連携して、疾病のリスク評価や再発防止の評価系を作っていくことです。神奈川県はこれからも、産学公民連携の中で意識して取り組んでいきたいと思っているところでございます。

鄭 雄一　例えば歯科の領域で未病の保険を果敢にやろうとしていますが、どう思われますか。

牧野 義之　保険の仕組みについては専門家ではないですけれども、公的保険がなかなか厳しい中で、個人の未病を個人の頑張りで終わらせずに、いろんな専門家がサポートして、効果が出たことに対してのフィードバックをどうするかが課題だと思います。そこはサブシステムとして、民間保険を使ってどういうふうにやるか、神奈川県の未病産業研究会でディスカッションをしていきたいと思っています。

鄭 雄一　そういうところにも、科学的エビデンスに基づく未病指標があると算出しやすいと思いました。

宮田 裕章　未病における介入要素は、活動、歩行、食事、睡眠、社会参加とすでに整理されており、歩行は可視化できています。睡眠を測定できるデバイスは、広く一般に普及している段階ではないです。食事は、入力負荷が高すぎて全然把握できていません。この３つだけでもグラデーションが全然違います。社会参加の部分も可視化がまだ弱いですが、ここは大きな余白であり、可能性があるのではないかと考えます。

2030 年に向けて、神奈川県は、未病や『Vibrant INOCHI』という仕組みづくりにおいてリードできると、世界的にこの取組みがより意義を持ってくるのではないかと改めて

パネルディスカッション

『未病指標で描く持続可能な社会づくり』

ディスカッションパート

思いました。

鄭 雄一　神奈川県がイニシアチブをとって研究を進めていくことも大切だと思いました。最後に、各登壇者の方から一言ずついただきたいと思います。

向野 俊史　「生きる楽しさと未病」、確かにそうだなと思います。『パシャッとカルテ』は、皆さんが本当に生きる楽しさを得るため、自分の健康状態を客観的に把握するためのアプリです。これを使って未病指標を社会実装していく仕組みづくりに貢献していければと思っております。

竹田 幸司　弊社の PHR の取組みは、患者さんの情報を医療従事者の先生方と共有できるようにしていくことからスタートしました。今後は未病への取組みを一層加速化していくことで、地域医療に貢献する沢井製薬と言っていただけるような存在を目指していきたいと思っております。

大塚 寛　今はスマートフォンの発達によって、言葉を発しないコミュニケーションが多くなっています。言語を使って会話をするという文化を失わないで、未病指標を社会実装していければと思っています。

池浦 富久　私は後期高齢者ですが、“健康に老いる”ということを、今日の会場のお一人お一人と一緒にやりたいと思います。とにかく仲間を増やさないと、どんな素晴らしい議論も理屈も広がりませんのでよろしくお願いいたします。

牧野 義之　“いのち輝く”の僕なりの解釈は 3 段階で、まず、科学技術に基づいて、当事者目線の未病の取組みをしっかりとやっていくことがベースだと思っています。2 段階目は、社会の中で周りの人たちと共生しながら生きていくことです。3 段階目は、自然環境も含めて、地球観、生命観の中で生きていくプラネタリーヘルスかなと思います。今年の秋の未病サミットでも議論を深めていきたいと思っています。

宮田 裕章　皆さんの素晴らしい取組みがある中で、僕も今 Vibrant な状態になっています。このセッションを継続しながら、ぜひ世界の打ち込みも神奈川県としてやっていただけるとよいのではないかと思いました。

鄭 雄一　『未病指標で描く持続可能な社会づくり』ということで、未病指標が果たすべき役割として基盤、詳細、商品って 3 段階考えておりますけど、多彩な指標が出てきております。これらを適切に組み合わせることで、持続可能な社会づくりに役立つのではないかと考えます。まだ足りないところは一生懸命埋めていくことが必要なのではないかということで、このセッションを締めさせていただきたいと思います。

閉会挨拶

本当に熱心なご議論をいただいて、未病というコンセプトがどんどん成長し続けていると実感します。

これからの目標は、笑いが広がる中で、未病指標も改善し、元気になっていく、みんなが楽しめる社会を作っていくことです。また、ただ生活しているだけで未病状態がデータ化されるなど、テクノロジーと統合していく必要があるのかと感じました。

さらに、AI を使った研究を進めるべきだと思いました。例えば、病院での問診や検査、チェックなどは AI がやって、未病の状態からその人の情報がデータ化され、最後は AI が「あなたの病気はこんな可能性が何 %、治療法はこれ。さぁどうしますか」と聞いてくるような時代はもう来ています。そのプロセスの中で、未病改善報酬システムを作りたいと思っているわけです。

以前、当時日本医師会会長だった横倉さんが、「未病は、大事なこと」「そもそも地域を健康にするのが医師会の仕事だ」と言ったことがありました。そこから医師会も未病という言葉を認めてくれるようになりました。



黒岩 祐治
神奈川県知事
ME-BYO サミット
神奈川実行委員会
名誉実行委員長

地域を健康にしたら、そこにお金が回ってくる仕組みである未病改善報酬システムを作る必要があります。そこに関わった人たちがお金の流れの中に位置付けられて、どう動いていくのかといったことを次の課題として考えていきたいと思いました。

※本開催記録は、シンポジウムにおける登壇者の発言を主催者が記録、編集したものであり、内容に関する一切の責任は主催者にあります。